



山下泰裕×船川淳志

相互理解の精神と“人間力”で グローバル社会に柔の心を提案

東海大学体育学部 教授
NPO法人 柔道教育ソリダリティー 理事長

山下泰裕

和の心を大切に、文化的背景の異なる相手との相互理解をはぐくみ、「世界から信頼される日本」を体現する。英語力を含むコミュニケーション力、そして柔道という自らの強みを活かし、教育や文化をはじめさまざまな分野でグローバルに活躍する山下泰裕氏。自身も柔道をはじめ武道経験のある船川淳志氏との対談で、世界を目指すビジネスパーソンに貴重な示唆を与えてくれた。

対戦相手に敬意を払い 勝者は敗者を思いやる

船川：山下さんは昨年の春、従来の活動に加えてNPO法人 柔道教育ソリダリティーを設立され、柔道の国際的普及・振興と途上国に対する柔道着などの援助、柔道による文化交流・異文化理解や青少年育成などにますます力を尽くされています。

山下：国際柔道連盟などの仕事とあわせて1年の3分の1近くを海外で過ごし

ていると、国や人々の多様性を肌で感じます。最近よくグローバルスタンダードと耳にしますが、世界を一括りに捉えるのは難しい。外国で柔道の指導をするときも、先に相手の習慣や考え方を学んでから柔道の精神や日本の心を説くようにしています。

船川：グローバルの一語で片づけ一枚岩と考えがちですが、実際には多極化しており、多民族・多言語が存在する。その現実をふまえないければ、何事も世界で深い理解を得ることはできないで

しょう。

山下：私は以前、英語となると通訳を介していました。でも、それでは相手と心から通じ合えない気がしたので、短期の語学留学などで勉強に努めています。今も場合によっては通訳してもらおうのですが、知らぬ間に自分で英語を話しはじめていることもあります(笑)。

船川：山下さんと、柔道六段でトヨタ自動車の前会長である奥田碩さんとの共著『武士道とともに生きる』でも引用されていましたが、小説『姿三四郎』

他者とではなく、 過去の自分と比べて 成長を実感する

に次のような言葉があります。「俺は英語を勉強する……それは、将来、日本の柔道を外国まで普及させたいからだ」。つまり、日本のために英語を学ぶ、という姿勢ですね。これは何度読んでも涙が出そうなくらい感動します。山下：あの本で奥田さんは「経済至上主義、利潤追求だけではいけない」「勝者は敗者を思いやるべきだ」とおっしゃっています。世界を代表する企業のトップの言葉だけに重みを感じました。柔道でも対戦相手は単なる「敵」ではなく、敬意を払うべき対象です。柔道の精神は、嘉納治五郎師範が掲げた「精力善用、自他共栄（己のもてる最大限の力を善きことに注ぎ、相手を敬い、自他とも栄えるよう努める）」のこの精神を出発点に、ビジネスでも文化交流でも相互理解が実現し、社会では弱者へのいじめも消える。ひいては世界平和にもつながると思うんです。

船川：欧米にKYOSEI（共生）の概念はかなり伝わってきていますが、私は嘉納師範の「精力善用、自他共栄」こそ、この共生の根幹だと思います。だから、ビジネスパーソンにももっとこのような世界に通用する日本発の価値観を知ってもらいたいし、それによって、

C o l u m n

夢、可能性、限界への挑戦

色紙には必ず「挑戦」の2文字を書きます。私は常に闘志あるチャレンジャーでいたい。今、神奈川県体育協会会長として県下の各競技団体や自治体も巻き込み、「いじめ」の撲滅に挑戦中です。運動部の子供たちには、フェアプレー精神を日常生活でも発揮し、率先していじめをとめてほしい。学校内外でいじめを見たら「おい、やめようよ」「〇〇さん、こっちにおいでよ」と一声かける。部活動のなかでそのように指導を進めています。

スポーツを愛する青少年は、きつといじめ撲滅の先頭に立ってくれる。この動きが全国へ波及していくよう、私もさらなるチャレンジに取り組んでいるところです。

世界から信頼される日本という立場が築かれると思うのです。

完全ではない自分を 受け入れる

山下：私はいつまでも、少しずつでも成長しつづけたいと思っています。一つは教え子たちが実社会に通用するよう育てるため。私が社会人として欠点だらけでは彼らの人生を狂わせてしまいかねません。理由がもう一つあります。

私が選手だった頃、最も活躍させてもらった試合の場は日本武道館でした。ところが私の教え子たちはなぜか武道館に限って優勝できない。やがてふと気づいたんです。武道館には、私が勝つことで夢破れてしまった人たちの悔しさの念がこもっているのかもしれない。そこで、「負けてもあの山下と対戦して満足だった」と思ってもらえる人間になろう。そのために柔道家の私は道場で学んだことを日常に活かす。それが第一だと決意を新たにした

船川淳志（ふなかわ・あつし） グローバルインパクト代表パートナー

1956年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。東芝、AIGに勤務の後、91年アメリカ国際経営大学院サンダーバード校の修士課程（MBA in International Management）を修了。米国のコンサルティング企業を経て現職。グローバル組織・人材開発のセミナーやNHK教育テレビ「実践・ビジネス英会話」で講師を務めるほか幅広く活躍中。著書に「Transcultural Management」（邦訳「グローバルマネージャー読本」）、「ロジカルリスニング」など多数。



んです。

船川：嘉納師範がそれまでの柔術諸流をまとめあげ、「道」とつけたのは、稽古や勝負で得たものを人生に活かすことを重んじたからですね。

山下：ええ。でも、私にもいろいろな迷いや煩惱があります(笑)。自分の理想と現状を比べて悩み、また特に若い頃は自分を実体より良く見せたいと思ったこともあります。でも、苦勞して



そんなふりをするくらいなら本当に自分を向上させるほうがずっといい。そして他者とではなく、過去の自分と比べて成長を実感することが有益です。何かしら徹底的に頑張った経験がある方は、そうした方が多いと思います。

船川：自分と常に闘うことですね。現役時代の山下さんの圧倒的な強さも、ご自身ととことん闘ってこられたからでしょうか。

山下：プレッシャーとは常に闘っていましたよ。試合前には、生あくびが多

く出たり。緊張しているしるしなんです。こう考えていましたね。「自分はこのために4年間頑張ってきたのだから、緊張するのも当然だ。緊張していると焦るのではなく、プレッシャーはあってあたりまえ。闘いはその日だけではなくそれまでの積み重ね。自分は今までできることはすべてやった。後は試合に臨んだとき、緊張した分だけ闘志を前面に出して挑戦することが大切だ」と思うようにしたんです。どうしたって不安はわいてくるし、そうなるのがむしろ自然。自分が不安を抱えていることを認め、不安と戦おうとせず受け入れてしまえばいいと。

船川：山下さんの高い自己認知力、つまりどんな自分も受容するところには、潔さを感じますね。

山下：理想は高くもちつつも、現状とのギャップに悩むのではなく、少しでも近づこうとする自分を認めてあげることが大切だと思います。

根性や忍耐よりも 挑戦、希望、夢

船川：歴史上の人物で「こうなりたい」と目標にする方はいらっしゃいますか。

山下：西郷隆盛を尊敬しています。理屈抜きに、彼には限りない魅力がある。

能力だけでなく、思いやりだけでもない、多彩な要素が凝集した総合力。それが人間力なのでしょうね。豊かな人間力をもって社会の役に立とうと志す人々は、互いに有機的につながって、より大きなことを成し遂げられると思います。

船川：全米人材開発機構の元会長であるスティーブン・ラインスミス氏は、著書で「リーダーにはheadとheart、さらにgutsも欠かせない」と述べています。IQとEQだけでなく胆力も、つまり総合的な人間力の概念は、日本も欧米も共通。そして今、有機的に「つながる」と言われました。このあたり、無理にでも「つなげる」という我意がなくて山下さんらしいと思いました。

山下：強制は、するのもしられるのも好きじゃないんです。根性や忍耐というのも苦手だし(笑)。柔道家なのに意外かもしれないですが、受動的な語感がどうも……。挑戦、夢、希望といった言葉のほうがずっと好きなんです。

船川：山下さんのマインドは外へ向かって開かれているのでしょうか。だから山下流の「以和為貴」(和を以って貴しと為す)は、閉ざされた和に非ず開放型。そこに、世界のさまざまな人たちとつながる鍵があるのですね。

柔道教育ソリダリティーをはじめ、山下さんのグローバルな活動が広く熱い支持を得て、次々と実を結びますようお祈りいたします。本日はありがとうございました。◎

Y a m a s h i t a Y a s u h i r o

Leader's
Voice

山下泰裕 (やました・やすひろ)

東海大学体育学部 教授
NPO法人 柔道教育ソリダリティー 理事長

1957年生まれ。84年、ロサンゼルス五輪柔道無差別級で金メダルに輝く。同年、国民栄誉賞受賞。77年から85年の引退まで203連勝を記録し、数々のタイトルを獲得。文部科学省中央教育審議会委員、外務省日露賢人会議委員、国際柔道連盟理事ほか多くの要職を歴任。現在、東海大学教授、NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長、神奈川県体育協会会長。近著に「武士道とともに生きる」など。

